

掲載号・キーワード・執筆者	内容
<p>その 34 (ニューズレター No.102 2021.10.発行) 「高潮の基礎知識」 押川 英夫 (佐賀大学 理工学部 准教授)</p>	<p>佐賀低平地は、台風が接近してくる南側で有明海に面しているために高潮災害の危険性が高い。氾濫被害が拡大し易い低平地では、洪水や津波、高潮を含めた水災害に格別の注意が必要である。台風時などに発生する高潮は沿岸海域の平均水面が上昇する現象であり、以下の3つの効果：①低気圧による海水面の吸い上げ、②空気の粘性（摩擦）と（湾奥で狭くなる）海岸地形に起因する吹き寄せ、③強風により発生する高波の影響、から成る。これらの内、影響が大きいのは①と②で、特に重大なのは②である。②による海面上昇量は風速の2乗に比例し、水深に反比例する。①に関しては、低気圧の通過に伴い空気が海面を押し付ける力が弱まることで、結果的に吸い上げる力が働くために海面が上昇する。③に関しては、風により発生する波は海岸に近づくにつれて高くなるものの、限界に達すると砕波（砂浜などで波が崩れる現象）が発生することに因る。なお、高潮と（地震などに因る）津波は発生要因が異なるだけで力学的には同じである（同一の式で記述できる）。その点は、高潮が風津波、暴風津波、気象津波とも呼ばれていることから理解できる</p>
<p>その 35 (ニューズレター No.105 2022.10.発行) 「エツと弘法大師と遣唐使船」 矢野 生子 (長崎県立大学 経営学部 教授)</p>	<p>筑後川の河口でしか取れないエツ（齊魚・刀魚・銀刀魚）は、カタクチイワシ科で体長 30～40 cm ほどで身は薄く、銀色の細かな鱗に覆われた透き通るような魚である。</p> <p>4月下旬頃、筑後川を遡って6月から8月に下流の水域で産卵する。料理法は刺し身・あらい・煮物・塩焼き・あらだき・てんぷら・南蛮漬け・酢のものなどで、小骨が多いため鱧のように裏表に200回以上の包丁を入れる。</p> <p>このエツについては次のような伝説がある。筑後川の河口に身なりの貧しい旅の僧が佇んでいた。対岸へ渡ろうとしたが誰も相手にしてくれず、見かねた老漁師が自分の舟で渡してくれた。この老漁師の親切に感謝した旅の僧は、お礼に「魚のとれないときは、この魚をとりなさい」と岸辺の葦の葉をとって川に流した。アシの葉はエツに姿を変えて泳いでいった。この貧しい旅の僧の正体は弘法大師であった。（『諸富町史』から要約）</p> <p>このときの弘法大師は、遣唐使として唐に渡って帰国した直後であった。つまり、遣唐使船は有明海の湊に帰ってきたことを説明しているのである。</p> <p>大善寺の荊津^{おどろつ}、筑後の瀬高、玉名町の高瀬は遣唐使船の寄港地であった。有明海の入りは天草の牛深港であり、北の玄界灘から有明海に入る場合は、大村湾から諫早市の船越を越えて有明海に入るのである。牛深と船越は海の交通の要衝だったのである。</p>